


25周年記念大会

平成11(1999)年12月4日、東北歴史博物館にて北海道・東北保存科学研究会の第1回例会が開催されました。発足から25周年をむかえる今年度は、国内外の保存科学の流れを振り返る記念大会を計画しています。会場は宮城、年明け2~3月あたりの日程で調整中です。詳細が決まり次第お知らせいたします。皆様のご参加をお待ちしております！

研究会だよりへ情報をお寄せください

日頃の取り組みやイベントのお知らせなど何でもOKです。皆さまのご投稿をお待ちしております。(次号は12月発行予定)

担当:土屋明日香  asuka@hiroshige-tendo.jp
tel.023-654-6555

【報告】新庄ふるさと歴史センターの被災状況

7月25日の記録的大雨は、山形県北部の庄内・最上地域を中心に大きな被害をもたらしました。2ヶ月経った現在も、避難生活、復旧作業、災害ボランティア活動が続いています。新庄市にある新庄ふるさと歴史センターでは、地下展示室で多数の民具が水損する被害がありました。昭和58年(1983)の開館。ユネスコ無形文化遺産である新庄まつりの山車を展示するとともに、地域の歴史・民俗・美術の資料を紹介する施設です。地下1階2階にある雪国民俗館では、6つの展示室で12,000点にもおよぶ雪国の暮らしにまつわる民具を収蔵・展示していました(すべて市指定文化財)。

今回の大雨で、排水処理以上の水が流入したことによる内水氾濫が発生し、地下2階で110cm、地下1階でも数cmが浸水し、約3,000点もの民具が水没しました。電気設備も被害を受けたことで、全館停電、空調も使えません。(現在も発電機の使用で、施設の一部で昼間だけ電気が使える状態です)

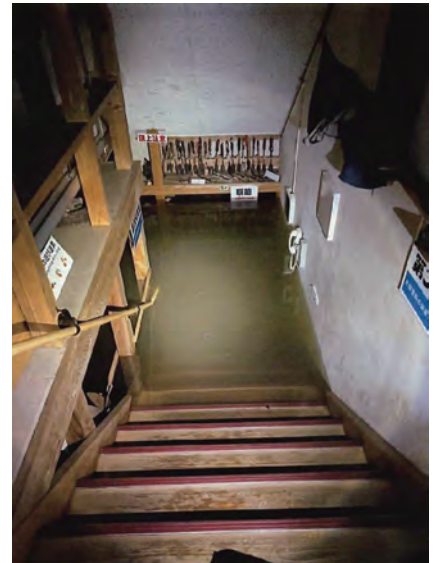
浸水発覚直後の26日から消防団のポンプで排水作業が開始され、翌27日夕方、水が引いたことが確認されると、歴史センターの職員によって、地下2階から水損した資料の引き上げが行われました。1週間後の8月2日から9月末の現在まで、山形文化遺産防災ネットワークを中心に、新庄市、山形県、県博物館連絡協議会、文化財防災センター、東北芸術工科大学、山形大学、筑波大学と協力して、5回にわたり文化財レスキューを実施しています。

- ・地下2階に残された資料の引き上げ
(水没しなかった資料、重い資料等)
- ・水没した展示室の清掃・除菌・除湿
- ・水損はしなかったものの湿度90%近い環境に残されたことでカビの発生がみられた
- 地下1階の資料のクリーニング・除菌
- ・乾燥済みの資料のクリーニング・除菌

館内は真っ暗で蒸し暑い環境での作業でしたが、多くの方々の支援によって、1歩ずつ復旧・再開に向かっていきます。ただ今後もしばらくは「資料保全」と「カビ対策」は続きそうです。(10月も2回ほど活動を予定しています)

これまでご協力いただいた皆さまに感謝申し上げます。また引き続きご支援のほどよろしく願いいたします。

(山形県 土屋明日香)



企画展示「歴史の未来 ー過去を伝えるひと・もの・データー」

「歴史的快挙」、「前代未聞」…私たちは、過去との比較を通して現在を理解します。過去という存在は、私たちが現在を生き未来へ進むための指標となっています。記録類や生活道具、語り継がれた記憶など、過去から伝えられたモノは、多くのことを私たちに伝えてくれます。これらを伝えようとした人びとの営みに注目すると、ありふれた過去の中から歴史的な意義を見出し、未来の人びとに継承する意思があることに気づきます。私たちも、現代に起きた大災害や「コロナ禍」という過去を記録し、未来へ伝えようとしています。情報技術（デジタルデータ）の活用はその営みを加速化させ、過去の伝え方も大きく変わろうとしています。

未来の人びとに向けて、私たちはどのような現在を伝えるのでしょうか。本展示では、歴史を伝えるさまざまな営みを紹介し、未来を見通す手がかりを考えていきます。私たちがこれから100年後、2124年に伝えたいものは、はたして何なのかを、この展示から考えてもらえると幸いです。

開催期間 2024年10月8日(火)～12月8日(日)

会場 国立歴史民俗博物館

展示内容や出品作品などの詳細はサイトでご確認ください→



(千葉県 天野真志)



第17回ヌマリニック

古墳時代のムラを復元した西沼田遺跡公園の秋のスペシャルイベント「ヌマリニック」。1500年前もやっていた!?…かもしれないムラの大運動会を開催します。古代競技は5種目(弓名人、たればす投げ、かけっこ、古代蹴球、土器つみ)。優勝者や複数種目参加者には豪華景品を用意しています。ほかにも展示室無料開放、西沼田サポネット100円フリマ、キッチンカー、スタンプラリー、復元住居でおやつ焼きなど盛りだくさんです!

開催日時 2024年10月13日(日) 10:00～15:00

会場 西沼田遺跡公園 (参加無料/事前申込不要)

(山形県 渡邊淑恵)



特別展「多賀城1300年」

古代東北の中心であった陸奥国府多賀城が創建されて1300年。多賀城がこの地でどのような役割を果たし、展開していったのか、古代の都や東北の動向、多賀城に関わった人々に関連させながら辿っていく展示です。

新指定重要文化財「宮城県多賀城跡出土品」をはじめ、多くの国宝・重要文化財を含む約700点が一堂に会するまたとない機会となっております。

開催期間 2024年10月12日(土)～12月15日(日)

会場 東北歴史博物館

(東北歴史博物館 HP より転載)





シウダー・ファレス自治大学 建築・デザイン・美術研究所
准教授 喜多 裕子

メキシコから、土の建築の材料・構法や保存をテーマに便りを寄稿しております。前回、西シエラ・マドレ山脈北部に見られる 20 世紀の土の建築の歴史・文化的背景などについてご紹介しました。その続きは次回に延期し、今回は、9 月半ばにアメリカ合衆国ニューメキシコ州サンタ・フェで開催された、土の建築の学会 EARTH USA 2024 に参加してきましたので、この学会の内容についてご報告したいと思います。

EARTH USA 2024

ARTH USA は、ニューメキシコ州を拠点に、土の住宅の計画・建設・保存に関して、教育・現場支援・知識の普及を通じて、施主および施工者・実務者・コミュニティを支援する非営利団体 Adobe in Action が、ほぼ各年で主催している土の建築・工学に関する国際会議で、今年で第 12 回目です。今回の学会の発表は主に次のテーマに関するものが多くありました。

- a) 持続可能な都市・建築の提案
- b) ワークショップによる土の建築技術の伝播
- c) 伝統的な土の建造物の記録・研究
- d) 3D プリンターでの構築物・建築への取り組み
- e) アメリカ合衆国での土の建築基準法（州政府／連邦政府）の改案 [パネルディスカッション]
- f) 土の建築の工学試験

各発表の梗概（英文）の PDF が学会のウェブサイトから閲覧及びダウンロードできます：

<https://www.earthusa.org/conference-schedule-earth-usa-2024>。また、編集された梗概集（印刷・デジタル）も販売されています：<https://www.lulu.com/spotlight/earthusa>。

発表はどれも興味深い内容でしたが、個人的に面白かったものを取り上げますと、**持続可能な都市・建築の提案**の中では、「廃棄物から資源へ：掘削土砂の建設資材としての再利用の可能性と条件」¹。フランス、パリ市における建設や都市インフラ工事の現場で出る掘削土砂の問題（廃棄量・場所、健康被害など）を、土の建築や構築物への再利用で補おうという試み。デスク上での計算だけではなく、実際に掘削土の分類・保管・供給まで、実際に循環させる実験や取り組みが紹介されていました。ファレス市では、パリや多くの大都市のような地下インフラはありませんが、学生さんがファレス市内の建設・施工会社に対して行ったアンケート調査の結果でも、建設・解体現場における廃棄物で最も多いものは掘削土砂でした。再利用は簡単ではなく、社会全体としての取り組みが求められ、さらには、現在の再利用だけでは掘削土砂の廃棄量に追いつかないのが現状ですが、提案だけではなく、実際にプロジェクトとして動いているところが興味深かったです。また、**ワークショップによる土の建築技術の伝播**に関する発表が多く、主催の Adobe in Action の主な活動の一つでもあるところから、主催者側・参加者側ともに興味の集まる話題なのだなと感じました。現在進行中の科研で共同研究者のアスール・ラミレスさんも、オアハカでのマサテコ民族の村における、伝統的な土の建築の研究およびワークショップの内容、「土の建築技法の変化を理解する戦略としての人類学における住宅改変の循環に関する研究：マサテコのコミュニティの事例から」²を発表しました。作成したワークショップの内容を主軸とした短編ドキュメンタリーも発表し、とても好評でした。YouTube でも公開されています：<https://youtu.be/nwFvCw6Yxh0?feature=shared>。ナレーションおよび会話はスペイン語とマサテコ語ですが、英語字幕が付いています。日本からも早稲田大学の大学院生が 3 人来られていて、土蔵の扉の周りに段に塗り込めら

¹ Salwa Cherkaoui El Baraka, Manuela Triggianese, Roberto Cavallo (Technical University of Delft) **FROM WASTE TO RESOURCE: THE POTENTIAL AND CONDITIONS OF REUSE OF EXCAVATED EARTH AS CONSTRUCTION MATERIALS**

² Florencia Tatiana Azul Ultramar Ramírez Rodríguez, Luis Fernando Guerrero Baca (Universidad Autónoma Metropolitana, Mexico) **RESEARCH ON THE CYCLE OF DOMESTIC DEVELOPMENT IN ANTHROPOLOGY AS A STRATEGY TO UNDERSTAND CHANGES IN EARTH BUILDING TRADITIONS. THE CASE OF A MAZATEC COMMUNITY**

れる防火のための掛子の形状に関する研究「土蔵の開口部の建築技術に関する研究」³、日本では珍しい土の組積造の建築技術に関する研究「山口県における組積造土蔵調査」⁴、また、中国四川省の地震後復興の際、土の建築の修復・再建に用いられた建築材料・技術の変化とその後の耐久性などのモニタリングを行った「中国四川省大根村における土壘住居に関する調査」⁵と、どれもとても面白い**伝統的な土の建造物の記録・研究**の発表もありました。3Dプリンターでの構築物・建築への取り組みも旬な話題で、陶器からインスピレーションを受けた構築物の制作「土を用いる建築：建築を学ぶ学生に土を建材として認識してもらうための教育学的アプローチ」⁶や「3Dプリンターロボットによる、ヌビアン・ボルトの建設」⁷などもありました。

ニューメキシコ州サンタ・フェ

学会が行われたサンタ・フェは、近くに北米先住民族が13～14世紀から住むタオスという集落に近く、スペイン統治下のメキシコ北部にあたります。17世紀初頭にフランシスコ会派の修道士によって創設された日干しレンガ造のサン・ミゲル教会などもあり、土の建築のメッカのようですが、多くの建築が土を模倣した色とテクスチャの外装をまとった鉄筋コンクリート造で、少し古びたテーマパーク感があります。「擬土製建築」(“pseudo-adobes” / “adobe-mimetics”)とも言われるようです。

図1. サンタ・フェのスペイン期土製建築(左)と擬土製建築(右)



余談ですが、科研の共同研究とは言いつつも、地理的距離もあるため(ベラクルス州・オアハカ州・ユカタン州・チワワ州)、共同研究グループの輪での対話というよりも、代表研究者と共同研究者間の線の連絡になってしまいがちです。面識もあり、お互い研究内容はある程度知っているけれども、今回、共同研究者のアスールさんと学会と一緒に参加できて、対面でいろいろと情報交換ができました。チワワ州のエル・ウィリーの集落で行った聞き取り調査の方法や内容についても、人類学的観点からアドバイスをもらえ、とてもよかったです。

次回は、チワワ州のエル・ウィリーの集落の風土的建築と景観に関する研究の続きをご報告できたらと思います。

³ Haruho Ueda, Midori Yamada (Waseda University) **RESEARCH ON ARCHITECTURAL TECHNIQUES FOR OPENINGS IN STOREHOUSES**

⁴ Yuiko Mizuno, Midori Yamada (Waseda University) **SURVEY OF STOREHOUSES WITH EARTHEN MASONRY WALLS IN YAMAGUCHI PREFECTURE, JAPAN**

⁵ Xiaoyuan Liu, Midori Yamada (Waseda University) **SURVEY ON RAMMED EARTH DWELLINGS IN RADISH VILLAGE, SICHUAN PROVINCE, CHINA**

⁶ Shawn Protz, Christina McMillan (School of Architecture, North Carolina State University) **BUILDING WITH CLAY: A PEDAGOGICAL APPROACH TO INTRODUCING EARTH TO ARCHITECTURAL STUDENTS**

⁷ Barrak Darweesh, Ronald Rael (University of California Berkeley / Muddy Robots) **ROBOTIC NUBIAN VAULT CONSTRUCTION**